

平成23年 第15回

東京都教育委員会定例会会議録

日 時：平成23年 9 月22日（木）午前 9 時38分

場 所：教育委員会室

平成23年9月22日

東京都教育委員会第15回定例会

〈議 題〉

1 議 案

第264号議案及び 東京都公立学校長の任命について

第265号議案

第266号議案及び 東京都公立学校教員等の懲戒処分等について

第267号議案

2 報 告 事 項

(1) 「都立高校と生徒の未来を考えるために－都立高校白書（平成23年度版）－」について及び都立高校の現状把握に関する調査の報告について

(2) 「東京文化財ウィーク2011」の開催について

(3) アスリートによる「一日校長先生」・「部活動指導」事業の実施について

委員長	木村 孟
委員	内館 牧子
委員	竹花 豊
委員	瀬古 利彦
委員	川淵 三郎
委員	大原 正行

事務局（説明員）	教育長（再掲）	大原 正行
	次長	庄司 貞夫
	理事	高野 敬三
	総務部長	松山 英幸
	都立学校教育部長	直原 裕
	地域教育支援部長	谷島 明彦
	指導部長	坂本 和良
	人事部長	岡崎 義隆
	福利厚生部長	前田 哲
	教育政策担当部長	中島 毅
	特別支援教育推進担当部長	廣瀬 丈久
	人事企画担当部長	白川 敦
（書記）	総務部教育政策課長	八田 和嗣

開 会 ・ 点 呼 ・ 取 材 ・ 傍 聴

【委員長】 ただいまから平成23年第15回定例会を開会いたします。

取材・傍聴関係でございます。報道関係は、時事通信ほか1社、合計2社から、個人は3名からの取材・傍聴の申込みがございました。また、NHKほか3社、合計4社からは冒頭のカメラ撮影の申込みがございましたが、許可してもよろしゅうございますか。——〈異議なし〉——では、許可いたします。入室をしていただいでください。

会 議 録 署 名 人

【委員長】 本日の会議録署名人は、瀬古委員をお願いいたします。

前々回の会議録

【委員長】 8月25日開催の前々回第13回定例会会議録につきましては、先日本配りいたしまして御覧いただいたと存じますので、よろしければ御承認を賜りたいと存じますが、よろしゅうございますか。——〈異議なし〉——それでは、第13回定例会会議録につきましては御承認いただきました。

前回9月8日開催の第14回定例会会議録を机上に配布しておりますので、次回までに御覧いただき、次回の定例会で御承認を賜りたいと存じます。

非公開の決定でございます。本日の教育委員会の議題等のうち、第264号議案から第267号議案までにつきましては、人事等に関する案件ですので非公開としたいと存じますが、よろしゅうございますか。——〈異議なし〉——では、そのように取り扱わせていただきます。

報 告

(1) 「都立高校と生徒の未来を考えるために―都立高校白書（平成23年度版）―」について及び都立高校の現状把握に関する調査の報告について

【委員長】 報告事項の(1)「都立高校と生徒の未来を考えるために―都立高校白書（平成23年度版）―」について及び都立高校の現状把握に関する調査の報告について、説明を都立学校教育部長、よろしく申し上げます。

【都立学校教育部長】 本日、厚い冊子を二つ配らせていただいておりますけれども、説明はA3版の資料でさせていただきます。報告資料(1)です。

「都立高校と生徒の未来を考えるために―都立高校白書（平成23年度版）―」と、本白書を作成するに当たって行った都立高校の現状把握に関する調査の結果について、併せて御報告します。

初めに、資料上段で白書作成の経緯ですけれども、現行計画の取組です。平成9年に都立高校改革推進計画を策定しまして、それ以後、新しいタイプの高校の設置など、生徒の多様性に応じた教育、そのほか学区の撤廃、学校の規模と配置の適正化などを行ってきたわけですけれども、この間、教育を取り巻く状況に大きな変化がありました。

一つは、国におきまして、平成18年に教育基本法の改正が行われ、それを踏まえて学習指導要領の改訂が行われました。そして、社会全体について見ますと、高度情報化とか、グローバル化が進展しまして、その中で日本の経済面での競争力が大幅に低下して、国際的な地位が低下したということが広く言われております。そして、就業構造も変わりました、若い人で見ますと、従来であれば、学校を出て正規の職に就くということ、また、長期勤続ということが一般的だったのですが、今や非正規雇用の若者が増加しています。こういったことを受けまして、意識の面でも自分本位の広がり、あるいは内向き志向、このような意識の変化が見られます。

そこで、社会の中で真に自立し、我が国の次代を担う人材の育成が必要であるということが広く社会の中で認識されるようになってきました。当然その中で、学校教育の果たす役割、責務が増大していると考えています。

こういったことを受けまして、従来、一人一人の生徒の多様性に対応した弾力的な教育を行ってきたわけですが、それだけではなく、社会の要請に応え、生徒の能力を着実に伸ばして、社会の中で真に自立できる人間を育て輩出していくということが必要であると考えています。こうした方向で、今後更に教育改革を進めていくという観点から、今回、白書を作成し、都立高校の現状と課題を明らかにすることとしたものです。

その下に白書の全体構成を記載しました。全部で6章構成で、第1章は、今、私が申し上げた内容を記載してあります。第2章で、都立高校生の能力や意識の現状と課題ということで、学力、社会貢献や社会規範に対する意識、体力と健康、そして職業的自立意識、最後にグローバル化の進展に対する意識という点について課題を抽出しております。第3章では都立高校の種類別に、第4章では教員や学校経営体制について、第5章では教育諸条件、第6章では高校への進学状況、就学計画の関係ですが、課題をまとめています。

もう少し具体的に2ページ以下で御説明したいと思います。2ページを御覧ください。以下、真ん中にグラフあるいは表を記載しておりますが、こちらを中心に御説明をいたします。

初めに上段の表ですけれども、これは高校に入学した生徒のうち、どれだけが修業年限で卒業し、どれだけが中途退学しているかを見ようということで作った表で、平成20年4月に全日制都立高校に入学した生徒がその後どうなったかということです。一番上の全日制全体で見ますと、4万66人が平成20年4月に入学して、3年後卒業したのが3万6,424人、中途退学した者が2,212人、率にして5.5パーセントに上っているというものです。

また、その下に定時制を記載してあります。定時制は基本的に4年制ですので、平成19年4月に定時制に入学した者が4,387人、そのうちC欄で1,705人が中途退学、率にして38.9パーセントに上っているということです。中途退学率で見ますと、確かにこの間、相当減ってきてはいるのですが、実数で見ますと、全日制・定時制合わせますと、毎年4,000人近い生徒が中途退学しているということは依然大きな課題であると考えています。

次の中段のグラフですが、これは今回、大学等に対して、近年入学した学生をどう見ているか、高校卒業時に習得すべき学力は備わっているかという質問をした回答です。右の方を見ていただきますと、「備わっていない」4.4パーセント、「あまり備わっていない」24.4パーセントということで、30パーセント近くが十分な学力を備えて大学に入ってきていないと回答しているということで、やはり学力の確実な定着が課題であると考えています。

一番下は、都立高校生の社会貢献意欲を見るために、「あなたは今後、ボランティアなどの社会貢献活動をしたいですか」と聞いたところ、「積極的に行いたい」、「機会があれば行いたい」を合わせますと、60パーセント近い生徒が肯定的な答えをしております。ここには紹介しておりませんが、社会規範という面で見ますと、かなり課題があると見ているのですが、社会貢献意欲という点で見ますと、思いのほか高校生は前向きであると思います。課題は、このような社会貢献意欲に応えられる機会をどのように作っていくかということであろうと考えています。

次に、3ページを御覧ください。Benesseの調査ですが、大学生を対象に、「高校生の頃、進路を選択する際の悩みとしてどのようなことがありましたか」という質問に対しまして、「適性がわからない」、「自分の就きたい職業がわからない」、あるいは「自分の進みたい専門分野がわからない」という回答をした学生が非常に多かったということです。高校卒業時までには、自分のキャリアについての認識を持たせることが今後の課題であろうと考えています。

次の中段のグラフは、都立高校生に、「あなたは今後留学したいと思いますか」という質問をした回答です。帯グラフの上ですけれども、「そう思わない」、「あまりそう思わない」を合わせますと47パーセントになりますけれども、左側の肯定的な回答よりも、むしろ否定的な回答の方が多いということです。否定的、消極的な回答をした人にその理由を聞いたところ、「留学に興味をひかれない」、「能力に自信がない」という回答が大半を占めたということで、一方でグローバル人材をいかに育てていくかということが課題になっていますけれども、これは相当な取組をしないと変えていくのは大変だろうと考えています。

次の一番下が専門高校の問題ですけれども、学科別に並べておりますが、特に下の

工業科・商業科ですが、まず高校入学時の志望ですけれども、工業科と商業科の受験倍率はいずれも毎年1.0倍近辺で、また、入ってからも、右に中途退学率を記しておりますけれども、かなり高いということで、これらからすると、不本意入学者がだいぶ多いのではないかとかがわかります。専門高校の活性化が課題であると考えています。

次の4ページを御覧ください。教員に関してです。一番上の真ん中のグラフですが、今回、都立高校の生徒に先生に対する印象を幾つか聞きました。その中の一つですが、「授業は上手ですか」という質問に対して、「そう思う」、「多少そう思う」という回答を合わせると39.8パーセントになります。もう少し高くあってほしいと思っています。教員の能力向上が必要であろうと考えています。

次に、入学者選抜制度についてですが、二つデータを記載しております。上の表は、前回の教育委員会定例会でも御報告しましたけれども、推薦選抜についてです。推薦選抜は、学力検査では見られない、見ることが難しい能力を評価して、多様な力を持った生徒を入学させるということがその趣旨ですけれども、にもかかわらず、そのために重要と思われる小論文、作文、あるいは実技検査を実施している学校が未だ少ないということで、これは推薦選抜の一つの課題ですけれども、大きな問題であると考えています。

また下段は、これは入学者選抜制度全体の問題ですが、現行の制度では、入学者の学力に相当な差が生じる場合があるということで、その結果、授業になかなかついてこられない生徒が生じる原因にもなっていると考えています。入学者選抜の在り方については、幅広く検討していく必要があると考えています。

最後に一番下ですが、これも何回か御報告してまいりましたが、都内公立中学卒業予定者数の今後の推移についてグラフにしたもので、今後、生徒の増加が予想されるということで、就学対策をどのように講じていくかが大きな課題になるということでまとめたものです。

以上、この白書で述べました幾つかの課題を御紹介させていただきました。今後は、この白書で指摘した課題を解決するために、どのような施策が必要か、それを検討しまして委員会にお諮りしていきたいと考えています。

次に、この白書をまとめるに当たり、また今後、高校改革の施策を進めていくための基礎資料にしようということで、今回、様々な意識調査を実施しましたので、その概略を御説明したいと思います。

5 ページ目がその全体ですが、6 種類の調査を行っておりまして、都民に対する意識調査、企業・大学等に対する調査、都立高校生が就職している企業に対する調査、都立高校生本人に対する調査、公立中学生に対する調査、都内の小・中学校の校長及び保護者に対する調査を行いました。調査内容は中段に記載したとおりです。今日は、その中の一部を御報告します。

6 ページを御覧ください。これは都立高校に対して何を期待するのかということを中心として、中学生の保護者、中学校の校長、企業、大学、そして一般都民、調査方法が違いますので単純に比較はできないのですが、まとめたものです。大きなところを見ていただきますと、黒い線は企業、大学ですが、「基礎的・基本的な学力を身に付けさせてほしい」、「社会のルールをきちんと守れるようにしてほしい」という答えが多くなっています。社会のルールをきちんと守れるようにということについては、中学の校長先生からも高い期待、あるいは要望が出ているものです。

次の7 ページを御覧ください。上段、2 ですが、高校進学時の学校選択に関する生徒の意識についてということで、左は都立高校生に対して、高校に入学するとき、どのように思っていましたか、何を重視していましたかと聞いたものです。多いのは、だ円形で印を付けていますが、「自分のやりたい部活動ができるかどうか」、「自分の学力に合っているかどうか」、「自宅から通学しやすいかどうか」、このような点を重視していたということです。右側に、中学3年生、これから高校入試を受ける段階の生徒に聞いたものです。「学習指導が充実していること」、「学校行事が充実していること」、「施設設備が充実していること」、このような回答が多くなっています。

下段ですが、都立高校生の素行についてです。これは一般都民の方に都立高校生の素行についてどういう印象を持っていますかと聞いたものです。全体で見ますと、「あまり良くない」、あるいは「良くない」の否定的な答えが幾つかの項目で多くなっております。特に、(5)の自転車の乗り方についてですとか、身だしなみについて、

これは一般都民の方に聞いたものですから、接する場面ということでこのような回答が出ているのではないかと考えています。

これは別の調査ですが、右に、高校新卒者の採用に当たって企業が重視すること、これは都立高校生が就職している企業に対して質問をしたものです。こちらにありますように、「挨拶などの礼儀・一般常識」、「熱意・意欲」、「周囲との協調性」、「健康・体力」、この辺りが圧倒的に多いということでございます。逆に、「専門的な知識・技能」、「専門的な資格」等については、重視するという回答が3分の1程度になっているということです。

以上、参考までに今回行いました調査の幾つかを御紹介しました。説明は以上です。

【委員長】 ありがとうございます。いかがでございましょうか。ただいまの説明に対しまして、何か御意見、御質問ございますか。

細かい点で恐縮ですが、2ページの真ん中の未卒業率というのは転出者のことですね。留年者も入っているのしょうけれども、中途退学者のところを見ると、全日制で2,212人、これは5パーセントくらいに相当しますね。

【都立学校教育部長】 はい。

【委員長】 ところが、次の3ページの右の都立高校全日制と志望予定調査、右側の平成22年度学科別中途退学状況を見ると、全日制では1.2パーセント。この数字の違いは何ですか。

【都立学校教育部長】 現在、中途退学率の算式につきましては、これは全国共通に在籍する生徒数を分母にして、その1年間に中退した生徒を分子に持ってくるというふうにしているのですが、それが3ページの右下の中途退学率の数値ですけれども、2ページの一番上の右端、これはあえて未卒業率という普通使わない言葉で表しましたが、これは分母がある年に入学した生徒だけということですので、大まかに言いますと分母が3分の1になっているということです。

【委員長】 前にも伺いましたが、3ページの方は、全在籍数分の中途退学者ということですね。

【都立学校教育部長】 はい。

【委員長】 そうすると、東京都のレベルは、全国の2パーセント弱とほぼ同じと

考えて良いのですね。

【都立学校教育部長】 はい。中退率で見ますと、現在は全国平均と同等です。

【委員長】 わかりました。ほかにございませんか。

【竹花委員】 白書を出すのは15年ぶりですね。なぜあえてこの時期にこういうものを出すのかということについても少し議論してきたわけでありませうけれども、私としては、この10年ほどの間に社会が大きく変わってきて、今の高校生が生きていく日本の社会、あるいは世界が、子供たちにとって、これまでどおりの覚悟、あるいは勉強、あるいは体力で本当に十分にやっていけない時代がきているというふうに思います。そういう状況の変化を踏まえて、今の都立高校はこれまでいろいろやってきたけれども、その良かったところと課題をできるだけ明らかにして、都民の方々に知らせをし、また、その中身についても、今後の都立高校を考える上で、都民の方々の御意見もいろいろいただいみようということで、この白書が作られたというふうに思います。それは非常に良かったと思いますし、内容としても、限界も含めて、かなり率直に書いておりますし、また、完全にはクリアにできない部分も、そういうものということとして書かれておまして、正直で率直なものだと思います。

私自身は、この白書の内容が時代の変化を捉えて、生徒が将来生きていく社会を念頭に置いて、都立高校に求められるものを改めてクリアにしてみようという新たな挑戦をしたものである、そういう努力が明確になっているもので、非常に意義のあるものだと思います。ひきこもりやニート、あるいは内向き志向の若者が増えてきたということは、つとに指摘をされているわけですし、それは都立高校の責任ばかりではないわけでありませうけれども、その中で、都立高校でそういう状況を変えていくために何ができるのかということを考えていくことは絶対に必要だと思いますし、その検討の一つのたたき台になるのではないかと思います。今後、これを基にして、教育行政にある私どもも、学校現場で子供たちに直接接している先生方も含めて、皆さんの衆知を集めて今後の在り方を検討することが必要であると思いますので、そういう検討の一つの有力な材料として意味のあるものだと考えます。以上です。

【委員長】 ほかにございませんか。

【内館委員】 すごく驚いたのが、留学に興味をひかれないという人が42.9パーセ

ント、ほぼ半分ですね。能力に自信がないとか、いろいろあるのでしょうか。昨日たまたま大学生と会いましたら、高校生のときに1年間、私費留学をしたのだそうです。言葉はすごく良くできるようになったし、ものすごく視野が広がって、本当に貴重な1年間だったと彼は言っていました。今、大学生ですが、そこで1年行ったことで思った大学に入れなかったというのです。それで、もっと困ったことに、今、大学の名前もあるのかもしれませんが、就職も大変で、彼が言うには、私は高校生の留学というのは絶対勧めないと言うわけです。自分はものすごく視野が広がったと言いながら、やはりそう言っています。就職が大変だから、大学生も留学する人がどんどん減っているというのです。高校のときに私費留学するときに、「おまえ、今頃そんなことをやっている場合じゃないだろう」とずいぶん言われたが、私は絶対後で役に立つと思ったから行った、しかし、結果的にはすごく辛いところにあるというのを、偶然、昨日聞いたのです。

この数字を見たときに、留学したいと思いますかに対し、「あまりそう思わない」、
「そう思わない」が18.1パーセント、プラスの28.9パーセントですから結構な数になっていて、それも、あの子の言葉を思い出すと分かる気もして、こうなると、根本的なところから変えていかななくてはいけないわけで、外を見ろと言ったところで、彼らにしてみれば、日本で生きていく上でどうなのかと思います。もしアメリカに、あるいは海外に行って、海外できちんと生きていければ、それはそれでいいけれどもというのもあるようです。

もう1件別の例ですが、すばらしい大学に入って、すばらしい大学のときに1年間留学をして、日本に帰ってきたら就職がない大学生がいて、その人は、結局、海外で教えるということを選んだそうです。とても良かったと思っていたのですけれども、海外でなかなか思ったようなことができなくて、50歳近くになって日本に帰ってきて、今もって独身だし、仕事もきちんとしたものはないそうです。そういった話が、どうしても若い人たちの間にマイナスの要素がたくさん聞こえるようになりますから、そういったところで、留学したいと思いますかという部分に関しては、これはどうしたものかと、解決策はないのですけれども、この数字を見て思いました。

【委員長】 それは社会の問題だと思います。7ページを見ていただきますと、右

側に高校新卒者の採用に当たって企業が重視することというのがあります。一番下を見てください。留学経験・語学研修経験を評価しているところは3.7パーセントしかありません。したがってこの傾向は若者の問題ではなくて、竹花委員の会社は別だと思いますが、企業側の問題だと思います。企業が変われば、あつと言う間になると思います。それから、最近は、就職が大変に難しくなっていますし、経済同友会の調査でも、海外経験を評価するという企業は800社のうち20パーセントしかありません。

【内館委員】 少しは増えているのですか。

【委員長】 増えているとはいえません。グローバル化して世界で勝負しているところは、そういう人材が必要なのです。例えば、このところ、日本が徹底的にやられているのが国際標準の関係です。国際標準は、本当に言葉ができて、英語のネイティブスピーカーと大げんかできるような人材でないとどうにもなりません。しかし、そういう人材がいないのです。そういう人材を育ててこなかったために、国際標準で徹底的にやられてしまっています。国際高校の卒業生について、お願いしてトレースしてもらっているのですが、私が視察したときは、そこの先生から、この子たちのふるさとは日本ではありません、自分たちが育った外国ですと言われて、非常にショックを受けたことを憶えています。このような状況は日本にとっては大変無駄なことをやっていることになります。最近は少し良くなったようですが、それでも、卒業生を調べると、国際標準のような大変な修羅場で働けるような卒業生は非常に少ないようですね。ですから、この問題は日本社会全体の問題として捉えないと、若者が内向き志向だという捉え方だけでは絶対片付かないと思います。

【内館委員】 その子たちと話をしても、私は絶対に勧めないというわけですから、そのときに彼らがどういう状況にあるかというのを聞いたときに、さあ行け、さあ行け、もっと視野を広げろと口だけで言ったところで始まらないなと思ったわけです。それは、今、委員長がおっしゃったように、本当に社会そのものが変わらなければいけなくて、でも、社会の変わり方というのはすごく難しいわけです。この子たちは今を生きているわけですから。

【委員長】 私はもともと余り楽観論者ではないけれども、この点については、日本はかなり急速に変わるだろうと思っています。そうではないと、企業は食べていけ

ませんから。前にも申し上げましたが、戸堂康之さんという東大の経済学の教授が、とにかく日本の産業はグローバル化しなければ絶対やっていけないという非常に鮮明な理論を打ち出しています。あれを読むと説得力があって、とにかく外へ出て行かないと駄目だということがわかります。外へ出て行くためには人材が要る。いつも申し上げていますように、一時非常に盛んだったAFS（アメリカン・フィールド・サービス）でアメリカに行かれた方が、主に女性ですが、今非常に活躍されていますね。そういう社会になれば、みんな行くわけです。結局はそうならざるを得ないので、比較的近い将来、大きな変換点があるのではないかと思います。このことについてエズラ・ヴォーゲルや、グレン・フクシマさんも同じことを言っています。いずれにしても、社会を変えていかないとはいけません。若者のせいではないということです。

【瀬古委員】 留学の話ですが、ある企業が日本人を採らないで、外国の留学生を結構就職させているという話を聞いているのですが、語学も当然、日本人が話せても外国人を採るといのはどういうことなのでしょう。

【委員長】 いろいろな理由がありまして、外へ出ている企業は、やはり外の事情の分かった人が良いということで外国人を採用しているようです。竹花委員にお答えいただいた方がいいと思いますが、実態は、外国人を採用すると言っているけれども、全体的にはそれほどの数は採用しません。パナソニックなどはどうですか。

【竹花委員】 うちの採用者の8割は外国人です。

【委員長】 グローバル化している企業はやはりそうでしょうね。

【竹花委員】 そうなってしまうのです。

【瀬古委員】 日本の中での就職は違うでしょう。

【竹花委員】 留学している人も含めて、外国人を結構採っています。それは、一つは、やはり外国でいろいろな物を売っていかねばいけないし、そのためには、いろいろな発想が必要なんです。組織全体が多様な人材で埋められないと時代の変化にとても対応していけないという思いが、過去の中でみんな教訓として得ているわけです。

【瀬古委員】 そうなってしまうと、日本人が留学しても就職はできないということにつながってきますね。

【竹花委員】 正直言って、それは言葉ができる人が有利ですよ。

【委員長】 そのとおりですね。

【竹花委員】 しかも、圧倒的に向こうの社会を知っている人が有利です。私はそう思います。大学の名前というのは依然として企業が採用するときにそれなりに参考にはしているところもあると思いますけれども、一方で、やはり言葉が即戦力としてできるというのは、それは魅力ですよ。今までのように、大学を卒業して、一生働ける企業が見つかるという時代ではなくなってきていますので、今でも、当社もそうですが、途中で中途採用というか、幾つかの会社に勤めてきたりして、そういう中で当社に来たいとおっしゃられる方を選んで採るという割合もずいぶん増えてきています。それは、日本のような、いい大学に行って、いい企業に行って、一生そこで過ごすということがだんだん変わってきている象徴だと思うのです。ですから、今、内館委員のおっしゃった、高校時代に1年留学した人も、言葉ばかりではなくて、いろいろなことを勉強されて、最初は少し日本社会の遅れもあって多少厳しい状況であったとしても、恐らく何年か頑張っていくうちに、必ずいい局面が生まれてくるだろうと私は思います。ですから、それはよく励ましてやってほしいと思います。別に留学するかどうかだけで一生が決まるわけではないと思いますけれども、そういう多様な経験を勇気をもってした人たちというのは、必ずどこかで評価される社会だと思います。

それからもう一つ、今おっしゃったこともあります。来年度予算を含めて、これから都立高校の子供たちにできるだけ外国での経験を是非高校時代にさせようということで取組を検討していますけれども、そういう私どもの取組も企業の方々に少し加わってもらい、一緒にやってもらおうということを少し考えることで、子供たちも、なるほど企業はこういう活動をしているのだと、そういうところで生徒の理解も広がっていくだろうと思うのです。単に勉強しに行くだけではなくて、外国で活動する企業の人たちも、こういうことをやっていて、こういうところで自分たちの外国での留学なり、あるいはホームステイなりを協力してくれるんだということがわかれば、もっと意識も変わってくると思います。そういう取組にしていくことも少し検討していけばよろしいのではないかと思います。

【委員長】 ノーベル賞をお取りになったパデュー大学の根岸英一先生が、確かに、

最近の若い日本人は外へ出たがらない。しかし、それは大変なマイナスです、人生一遍しかない、とにかく、苦しくても外国へ出れば、それだけすばらしい経験が得られる、人間も大きくなる、だから、是非出てくださいというメッセージを出しておられます。出なくなった理由は、根岸先生は、余りにも日本が住みよい社会になったからだというふうなことをおっしゃっていますが、それはそれとして、やはり出るということは、今、内館委員が引用された若い人も、その経験は必ず何かの形で生きてきますよ。間違いなく視野が広がります。

【内館委員】 貴重な1年だったとはっきり言っていました。

【委員長】 本人が自覚しているということは、行って失敗したと思っていないということです。

【内館委員】 私を行かせてくれたと言って親にまで感謝しているのです。

【委員長】 それは間違いありません。

【竹花委員】 ただ、高校生のときに1年間かどうかというのは少し考えなければいけない。今の日本の社会の有様もありますので。でも、昔行った人の中にも、何とか頑張っていい大学に入った人もおられますけれども、やはり大学生が比較的自由な時間がある時期だと思うので。

【委員長】 大学も、一生懸命そういう努力をしているところもあります。ですから、今の竹花委員の話で、AFSについて言うと、お名前を申し上げて失礼ですが、川口順子さんとか、鳥飼玖美子さんとか、ああいう人たちはみんな行っています。そして大活躍しています。あの頃は外国へ行くということは大変な時代でしたからね。

【瀬古委員】 昭和何年頃ですか。

【委員長】 お歳のことを申し上げては失礼ですが、鳥飼さんは今65歳くらいでしょうか、川口さんも70歳過ぎていますから、ずいぶん前です。

【瀬古委員】 昭和40年代初め頃ですね。

【委員長】 要するに、アメリカなどへ行くことは不可能だった時代に行ったのですね。

【竹花委員】 日本の高校生の卒業旅行がどこか海外に集団で、それは違うと思うのです。

【委員長】 全く同感です。

【竹花委員】 そういうものとは少し違った、もう少し実になるもので、しかし、余り長期にならないような工夫を今度の取組の予算のプランの中でも考えていけば、そこそこのものが考えられるのではないかと思います。そこにできたら多くの企業を巻き込んでやれば、今、多くの中小企業が海外へ出ています。

【委員長】 出ています。

【竹花委員】 出ざるを得ません。

【委員長】 人材を必要としていますから。

【竹花委員】 ですから、木村委員長のおっしゃる統計がどういう統計かわかりませんが、東京商工会議所を含めて、私どもの取組が決まれば、企業の方々にも協力を求めるために一回話をしてもよろしいと思います。

【委員長】 そうですね。なかなかお忙しい方たちばかりだから、我々の方で行って、個人的にお話しすると、みんな賛成なのです。ところが、データとして出てくると全然駄目なのです。

【内館委員】 それは、やはり目先の利益というか、目先が大変だから、そんな先々のことまで広く考えていられないということですか。実行できないというのは。

【委員長】 先ほどのデータですが、7ページの右下、企業が高校卒業就職希望者の採用に当たり重視することについて「専門的な知識」というのは少ししかないです。ほとんど礼儀とか熱意とかに重きを置いています。外国人が見たら、「何、これ。」とみんな笑いますよ。

【竹花委員】 基本的に、日本の高校生が幼いのです。

【委員長】 アングロサクソンの世界では高校を出たら大人なのです。親もなるべく子離れしようとしています。子供は親離れしよう、親は子離れしようと思っているけれども、日本の社会はそうではないですよ。幼いのは、そういうことからもきています。

ほかによろしいですか。

【瀬古委員】 この白書は本当に御苦労さまでした。今後の素晴らしい取組になると思います。7ページの3番、高校生の素行に関して。これは、「良い」ということ

ろが15パーセントくらいで、「良くない」というのが半分以上。これは少し問題があるのではないかと。これは、たぶん当たり前だけ当たり前のことができないということになっているのではないかとこのように思うので、この辺もこれからの取組かなど。就職するときの挨拶、礼儀、一般常識、こういうものが99パーセント近いところにあるわけですから、やはりこういうところがしっかりしていないと非常にまずいのではないかと思います。私は体育会系だったものですから、挨拶など最初に勉強よりもそちらを教えられたものですから、その辺はしっかりこれからやっていってほしいなと思います。勉強も大事ですけれども、やはり基本は人間の挨拶などが大事だと思っていますので、是非「良い」を半分くらいにもっていけるような形にしていきたいと思っています。以上です。

【委員長】 これは、悪い例しか目につかないから、どうしてもこういうデータになるのです。ある意味仕方がないですね。

よろしゅうございますか。本当にいろいろな問題点を洗い出させていただいて、ありがとうございました。大変なことですが、もう少し白書を出すサイクルを短くできるといいですね。そうすると、時代性が比較できます。

もう一つコメントしようと思ったのは、最近の若者が20年くらい前とはずいぶん違っているという点です。3ページの一番上の真ん中、「高校生の頃、進路選択する際の悩みとして」^{うんぬん}云々とありますね。これが、今の若者のほとんどがそうなのです。

「自分の適性がわからない」、「自分の就きたい職業がわからない」、「自分の将来がわからない」、この回答が非常に多いのです。私、いろいろな調査をしていますけれども、ある学者が10年おきに同じ高校で調査しているのですが、20年くらい前まではこういう回答は非常に少なかったのですが、15年くらい前から急に増え出して、どんな調査をしても必ずこれがトップにくる。自分の将来がわからない。ですから、教育の仕方もその辺を考えないといけません。

【瀬古委員】 高校生くらいで自分の将来がわかるんですか。

【委員長】 わからないから不安なのですね。

【瀬古委員】 普通、高校のときは余り考えないじゃないですか。

【委員長】 わかりませんが、わからないからといって、そんなに不安を持

たなかったです。

【瀬古委員】 不安は持たないですね。

【委員長】 そうでしょう。それが今ものすごく不安を感じているのです。

【内館委員】 20年前は少なく、今は増えてきたというのは、何か理由があるのですか。

【委員長】 中教審の人たちといろいろ話をしたのですが、一言で言うと幼さでしょうか。さきほど竹花委員が言われた、そういうことなのかもしれませんね。

【川淵委員】 資料4で、6ページにあります。都立高校に対する期待。「社会のルールをきちんと守れるようにしていくこと」というのが、校長先生や保護者の意向として強く出ているんです。「社会のルールをきちんと守れるようにする」ということは、守れていないという意味ですね。具体的に守れていないというのは、7ページにある素行というところと同じなのかなと。この中身は一体どういうことを言っているのかというのがわからないと直しようがない。これは、具体的には、大体こんなことですよということがわかっているのですか。

【都立学校教育部長】 この調査では直接わかりませんが、7ページの先ほどありました自転車の乗り方とかです。

【竹花委員】 電車とかバスとかです。でも、それは都立高校かどうかかわからないですね。

【委員長】 そういうことがあるのです。それから、大人も決して良くないです。どちらが悪い、わかりませんよ。

【川淵委員】 それと、さっきお話が出たのですが、高校生が幼いという話というのは、いわゆるゆとり教育の影響がそういうところに出ているのか。いわゆる全体の流れで、ずっと過去10年、20年もそういうことなのか。そして、この調査というのは5年に1回くらいされるのですか。

【都立学校教育部長】 今回、白書は15年ぶりに出しましたが、一定の共通の部分は5年ごとに調査をやってございます。特に都立高校に対して、どういう印象を持っているかというのは5年おきにやっています。

【川淵委員】 そういった流れがいい方向にいつているのか、悪い方向にいつてい

るのかというのは、この資料を見ただけではわからないので、いずれにしろすばらしい調査だと思うのですけれども、そういう流れを見ながら次のステップに入っていくということも大事だなという感じもします。資料が余りにも豊富で記憶が薄れているところもあるのですけれども、やはり学校教育の中で、これは今は全然関係ないかもしれないかもしれませんが、先生の授業力というのに七つくらいの項目が書いてあって、これは本当にすばらしいなと思いました。これを、白書に書いてあるだけではなくて、先生は知っているのでしょうか。その辺のところは、問題意識としては、教育委員会はそういうことを十分理解していても、知るべき人が知っていないという可能性もかなりあるなと読んで感じました。

【委員長】 先生の授業力は余り高くないですね。今、川淵委員がおっしゃったようなことは、白書が16年ぶりで少し時間が空き過ぎているからよくわからないのです。ですから、例えば5年ごとに出して、同じようなデータを追跡して出していくということも必要ではないかと思います。

【川淵委員】 手間が大変だと思いますけれども、資料を見て、やはりそれぐらいのことをする価値があると思いました。

【委員長】 ありますね。ちょっと話題を変えますが、最近、日本で人材の劣化ということが言われていますが、これは日本だけではありません。世界的な傾向として、どこの国もそういうことが言われていますし、アングロサクソンの世界は、割合に子供は早く親離れしようとし、親は子離れしようとしています。そういう社会的な慣習があります。しかし、そのような国でも、子供が幼稚化しているというような議論は出ていますね。同じような傾向が世界中で出始めているということは確かにありますね。

【竹花委員】 川淵委員の御指摘で、私もお話し申し上げたいことがたくさん出てきたのですけれども、一つは、今、木村委員長がおっしゃった将来についての考え方について、こんな状態だというのは本当に心配しなければいけないことではあるのですけれども、それと、今のゆとり教育という問題と少し関連があるようにも感じます。というのも、小・中を含めて、個性を大事にして伸び伸びと育てるという、それ自体としては間違っていないのですけれども、こういうこともある、こういうこともあるという大人の側からの様々な情報の提供や、考え方の提示といったものを少し妨げてき

たのではないか。すぐ押しつけだというふうに言われるのではないかというところがあつたようにも思うのです。

例えば中学校で、私の主催しておりますNPO法人で、土曜日だったのですが、多くの経営者の方々や、あるいは現に今、企業で働いている地域の方たちが、一教室もつていろいろ子供たちに、その人たちが先生になって教えている授業をずっと見てきたのですけれども、そこで、あるJTBに勤めている、女性の50歳近い方ですけれども、彼女が、どうやって職業を選ぶのか、今の中学生が何を考えなければいけないのかという話をしているんです。自分の経験を言っているのですけれども、私が非常におもしろいと思ったのは、「私は実はそんなによくできたわけじゃないけれども、あるアメリカ人の歌手が好きで、その歌手が歌っている英語の歌詞がどんな意味なのかということ調べたところ、少し英語が好きになったのです。できたわけじゃないのですよ。でも、それがずっと自分の一生を決めてきたのです。大学を選ぶときにも、英語を勉強する大学を選びました。特段の理由はないのですよ。ちょっと自分の好きだったことを大事にしておくと、振り返ってみると、そこで自分の一生は決まってきたのだなというふうに気がつくのです。ですから、皆さん、どこか自分が、得意とか得意でないとか、できるとかできないではなくて、ちょっと興味があるということ少し大事にしてみたらどうですか。」という話をしているのです。

それで、はあとって。それが職業に結びつく人もいないけれども、職業以外の自分の人生を豊かにするものに結びつくこともあるわけです。そういうことを子供たちにいろいろな人から伝えていく作業を小さいときからしていくことが、こういう結果にならない保証だと思うのです。ですから、都立高校の改革で我々にできること、できないこともあるわけですが、やはりこういう結果も、中学校の先生や小学校の先生にもうまく伝えることで、みんなで我々が持っている関心事項を伝えていくことはとても大事ではないかと思えます。

もう1点ですが、この白書を出して、我々は都民の意見をこれからの高校改革について求めていくわけですね。それは一生懸命いろいろな方が言ってきてくれるからいいのですけれども、先ほど川淵委員がおっしゃいましたが、先生たちに意見を求めましょう。あなたの意見はどう思うか。自分の高校だけじゃないですよ。自分のやって

いる教科だけじゃない。都立高校の在り方について、あなたの経験を踏まえて、どう思うかというのを、さっき私は学校現場の先生たちの衆知も集めてということをお願いしたけれども、そういう意見ももらいませんか。そうすることで、先生たちも、今の高校はどうあるべきか、自分の授業はどうあるべきかということについて、自分なりに自発的に考えていく機会にもなるだろうと思うのです。そういう先生をもっと作って、もっと大事にする、そういうふうにしませんか。そのようなことも少し考えてみたらどうかと思います。

【委員長】 是非そうしていただきたいと思います。

【川淵委員】 言いたいことがあって、今、先生の年齢構成というのはいびつですよ。若い人が少なくて、定年間際の人がかかり多い。だから、絶対数として退職する人がこれからどんどん増えていく。そういった先生をどう再雇用するかということは当然考えておられるのですか。それは、この中には別に書いてありますか。

【教育長】 それは随時やっています。

【川淵委員】 是非そういう貴重な経験を活かしてほしいということと、それから、学校のいろいろな診断をした人は、その中で私が印象深いのは、例えば授業で数学でも英語でもいいですが、同じ学校でも先生によってやる方向が違う。だから、先生が変われば、一つのベクトルに沿って生徒が教わっていないかのような報告があって、やはり同じ授業をする先生、あるいは学校を通じて、この生徒をこういうふう育てていくんだというベクトル合わせというか、コミュニケーションの取り方が全然足りないという印象をこの報告書から受けました。だから、やはりそのところが大問題で、ということは、先生はそんなにしょっちゅう話をしていないということです。新人の先生が入って、例えば会社員だと、部長がいて、課長がいて、係長がいて、それぞれ指導されながら、オフ・ザ・ジョブトレーニングも入りますが、オン・ザ・ジョブ・トレーニングで育てられていく。学校の先生の育てられ方というのは、そういう会社の育てられ方とまるで違って、最近、少し副校長、主幹、主任という形でピラミッド型にしようという方向にいらっていると思いますけれども、少なくとも組織の在り方として、やはり私はそこに問題があると思うのです。それは、今まで日本の教育の一番いびつなところだったと私は思うのですけれども、先生でもやはり新人は新人

なわけです。経験もない、いろいろな知識ありません。だから、そういうことを教えられながら、人のいろいろな良いことを聞きながら自分のものに取り入れていくという機会が、先生は全く少ないのではないのでしょうか。だから、自分のやり方が一番いいものだと思って、よその授業を見たら、こんないい授業をしているのかと、そういうことを見て初めて先生方のレベルが上がっていくわけで、そういう機会というか、そういうものを組織の中にきちんと決めておかないと、そういうことをやりたい人だけがやるという、自主性に余りにも任せ過ぎているのではないのでしょうか。だから、やはり20年、30年経験した先生と、入ったばかりの先生との教え方のレベルの差があるのは当然の話ですし、少しでもいいものを自分が身につけるために、自分の意思でやるということが中心である今のやり方というのは、全体をレベルアップしていく方向には進まない。いいコーチの下に指導されないと、いい選手は育たないのです。自分で1万発、ゴルフのボールを打つのと、指導者に習って100発打つのとどちらがうまくなるかといったら、それは指導者に習って100発打った方がうまくなるに決まっています。1万発打つてもしょうがない。無駄なことをやっているわけです。この報告書を読んで、そういうことをやっているのが大部分であるかのような印象を受けました。だから、そこをやはり変えていかないとはいけません。

【委員長】 その辺はどうなっていますか。

【教育長】 新人教育も含めて、研修の仕組みをちょっと説明してください。

【指導部長】 国の法律では、教員になった1年目に行う初任者研修と10年目に行う10年経験者研修だけが必修ということで法律上定められて研修を受けていますけれども、東京の場合は、今おっしゃったように、若いうちにもっといろいろなものを勉強してもらいたいということで、採用1年目、2年目、3年目で、3年間ずっと必修の研修を取り入れて、今年3年目になりました。

【川淵委員】 それはいいことをやっているのですね。

【委員長】 その辺は、川淵委員が言われたのはいわゆるメンターですね。私もしょっちゅうここで申し上げているのですが、イギリスは教師になるときに免許証は要りません。イニシャルティーチャーといって、学校へ就職すればそれでおしまいです。その代わりに、給料はものすごく安いです。それで、ずっといろいろなもので評価され

て、評価が良ければ、地位も給与も上がっていきます。最終的には、校長先生になると、かなり高い給与がもらえます。一時、トニー・ブレア首相よりも高い給料をもらっている校長が何千もいるという状況になったこともあるようです。

それはともかく、絶えず教師の技量・資質を上げていくためには、いつでもメンターがついています。そして、川淵委員がおっしゃったように非常に素晴らしい授業をする人が絶えず見ながら、あなたの授業のどこが良かったか、どこが悪かったかと、そういうことを繰り返して議論することによって若い教諭が成長していくのです。それほど大きなシステムになっているとは思いませんが、それに近いようなことは東京都でもやっています。

【教育長】 実は、教員の資質ということに関して、それは国も地方もみんな問題意識は持っています。国の方が今やろうとしているのは、教員免許を今は大学を出れば取れるのですけれども、大学院の修士課程まで行かないと教員免許が取れないよう6年制にしようという議論があります。それはどういうことになるかという、今、日本全体で、小・中・高校まで含めて、教員が大体2万5,000人くらい採用されています。一方で、医学部も法学部も全部含めて、大学院全部のキャパシティは7万5,000人くらいです。ということは、全ての大学院を全部教師養成に振り向けても、そこから出てくる人は採用数の3倍しかいません。採用試験で3倍というのは、かなり緩い試験です。それだけのことをやって、日本全体の大学院をみんな教員養成にするなんてできるわけがありません。そういう免許制度をいわば高学歴化することで、教員の質を高めようという動きに対して、これは別に東京だけでなく、ほかもそうだと思いますが、そういう数の上で実現できないようなことではなくて、現に4年の大学を出て入ってきている人たちを徹底的に鍛えて、早く良い教師にしていこうとしています。それは川淵委員がさっきおっしゃったのと目的は全く同じで、そのための手法として、正に教員の新人研修も1年から3年に延ばします。それから、主任教諭、主幹教諭というのを作って、OJTで、あなたたちは若い者を指導するという役割を背負わせます。そういう実務的な工夫というか、仕組みを作って、教員養成をしています。ですから、私たちのやっていることというのは、かなり良いと自負しています。100点とは言いませんが、ベテランの教師が辞めていくと、相対的に指導力

が落ちますけれども、その辞めた教師を新人教員と組ませてペアにして、ノウハウとか、ものの考え方とか、礼儀作法まで教えていく、そういう仕組みも作っています。かなりいろいろなことをやっております。

【川淵委員】 安心しました。

【委員長】 まだ安心は早過ぎます。

【竹花委員】 川淵委員のおっしゃることは的を射ていて、我々もずっとそういう問題意識を持ってきたわけで、いろいろ施策をやっているのですけれども、やっています、やっていると、その結果がどうかということが大事だと思うのです。そこをどうやって検証するのか。新しい仕組みを初めて3年目になりますけれども、それをこの機会に、川淵委員の問題提起もありますので、一度進めてみてくれませんか。その際のやり方は、現に新人教育を受けた人たちの率直な意見を聞いて欲しいのです。私たちがやるときに、どうも教育の世界というのは上意下達が強くて、なかなか相互のコミュニケーションが乏しいということがあるのではないか。それは現場も同じだと私は思うのです。そこをうまい方法を考えてすることもきちんとやってみてくださるようお願いします。

【委員長】 先ほどJTBの女性の方の話をされましたが、人生のどこかで動機付けがなされます。日本の場合には、高校生はともかく、中学生くらいのときに動議づけをする機会というのはほとんどないです。それも非常に大事で、そういう点で、フィンランドのやり方などは非常に参考になって、例えば2週間お菓子屋に行って働くとか、あるいは航空会社へ行って働くとか、実際に社会がそれを受け入れてくれる、ただの見学ではないのですね。現実には仕事をやるのです。システムは実にうまくできていますね。チョコレート屋などで働いている子は、お客さんにどのチョコレートが欲しいのかと聞いて売っています。それで、失敗することもあります。お金を受け取って、お釣りを渡すことまでさせます。何かそういう社会の実体験みたいなものを中学生くらいのときにやらせると良いと思います。ただ、日本で2週間そういうことに時間に費やすとなると、また学習指導要領の関係で問題になると思うのですが、フィンランドのやり方はとても良いと思いました。職場も本人が探してくるのです。

【竹花委員】 JTBの場合は、なぜJTBを選んだのでしょうか。外国に行くか

らです。英語を使えるから関心があるのです。彼女の言っていることは、できるとかできない、他人との比較ではないということです。あなたは何がおもしろいと思うか、そこを大事にします。それは、なるほどと思いました。もちろん、先生方にそういうことを教えられる方もおられるでしょうけれども、社会のいろいろな経験を受けた方々に動機付けをしてもらうことはすごく大事だと思います。

【委員長】　そうですね。大変活発な御議論、ありがとうございました。この白書はかなり評価されているようですので、大変なことだと分かった上で申し上げるのですが、もう少しピリオドを縮めて出していただくと、さきほど川淵委員がおっしゃったように、連続性、不連続性が見えてくると思いますので、よろしく願いいたします。

よろしゅうございますか。――〈異議なし〉――それでは、この件については報告として承ったということにさせていただきます。

(2) 「東京文化財ウィーク2011」の開催について

【委員長】　それでは、報告事項の2番は、「東京文化財ウィーク2011」の開催について、説明を地域教育支援部長、よろしく願いします。

【地域教育支援部長】　それでは、「東京文化財ウィーク2011」、要点を御説明します。

まず、「文化財ウィーク」の趣旨です。文化財ウィークは、文化の日を中心に展開するものですが、「ウィーク」と銘打っていますが、実際には一日だけのものから2か月にわたるものまで期間に幅があります。事業名というふうにお考えいただきたいと思います。都内全域の文化財の公開や文化財に関わる様々な企画事業を実施し、都民が文化財に触れる機会を提供し、文化財の保護・管理にさまざまな形で参加していただく、これが目標ですが、このウィークを始めた頃は文化財の保護ばかりだったので、保護から、多くの方の手による管理、そして文化財の活用へ、そういう目的で現在は事業を展開しています。

事業の概要ですが、公開事業、企画事業、それから東京都教育委員会主催事業の三

つがあります。まず（１）公開事業ですが、今回の特別公開というのは、460件の文化財のうち120件、通常公開していないものを10月29日から9日間公開するものです。

それから、２点目の企画事業は、20区24市2町49団体225の事業がこの企画事業として参加するものです。

それから、３番目の東京都教育委員会主催事業、アのところですが、これは外国人観光客の誘致を目的とするものでして、そのために在京大使館や海外プレス等の方々を対象として講演会を行うものです。

それから、資料右側、今年度の新規参加事業ですが、お手元に二つの「文化財ウィーク」の冊子がございます。今までは１種類のもの、正確に言いますと、文化財ウィークの特別期間だけの事業を書いていましたが、１年通してやっているものもきちんと御覧になりたいというお声も大変多く寄せられましたので、下が^{だいだい}橙色の「特別公開・企画事業ガイド」という今年度の特定期間の事業ガイドと、１年間にわたってずっと見られますよという緑色のものと分けてございます。これは大変人気が高いので、たくさん作っていますが、すぐになくなってしまいます。今年度の特別公開ですが、写真を見ていただきたいのですが、村川家住宅主屋、これは木造二階建ての和風住宅で、国登録有形文化財です。個人の所有で、現在も住居として使用しております。そういう意味ではなかなか公開ができないのですが、今回、この調査をしました工学院大学の研究室の方でも御協力をいただいて、初めて公開することになったものです。

それから、その右隣の絹本着色^{こくぞうぼさつ}虚空蔵菩薩像ですが、これは室町時代中期の密教絵画です。これは足立区の總持寺、通称・西新井大師の所有です。これは、西新井大師に展示場所がありませんので、今回、足立区の方で管理等も含めて協力をして、10月31日、たった一日ですが公開をするというものです。

それから、今回新たに通年公開に加わったものというので12件ありますが、写真の本町田遺跡は、縄文時代前期と弥生時代中期の遺跡が同一のところで重なって出土しているものです。これは、都の補助を受けまして、町田市が遺跡公園として整備し、今年度から公開をしています。

それから、八丈町の高倉（六脚倉）です。これは八丈の風土の中で、ねずみ返しがついた正倉院のような高床式のことですが、江戸末期に建てられたものです。

次に、企画事業として写真を載せてありますのは、柴又八幡神社古墳出土埴輪^{はにわ}というものでして、これは葛飾区の方で「東京下町の古代を探る」というツアーイベントをやって、その中で文化財解説を行うというものです。

それから、写真はありますが、旧前田侯爵家駒場本邸（洋館）の文化財解説、これは、今回のが黄色い冊子の1ページをめくっていただきますと、表紙の裏に「前田侯爵って誰？」ということで御案内をしようと思っています。昨年も一日実施したのですが、大変人気が高くて、今年は10月29日から11月6日まで、毎日これをボランティアによって実施しようと考えています。

ちなみに、昨年東京文化財ウィークには、54万5,000人ほどの御参加をいただきました。今年度は、57万人の参加を見込んでおります。これは公開事業のみの数値でありまして、企画事業も含めると、今年は昨年の78万人を上回る御参加をいただけるものと期待しているところです。

説明は以上です。

【委員長】 いかがでございましょうか。ただいまの御説明に対しまして、何か御意見ございますか。よろしゅうございますか。——〈異議なし〉——それでは、この件については報告として承ったということにさせていただきます。

(3) アスリートによる「一日校長先生」・「部活動指導」事業の実施について

【委員長】 報告事項の3番目、アスリートによる「一日校長先生」・「部活動指導」事業の実施について、説明を指導部長、よろしく申し上げます。

【指導部長】 それでは、報告資料(3)に基づきまして、アスリートによる「一日校長先生」・「部活動指導」の事業について御説明をします。

現在、東京都教育委員会では、子供の体力向上を目指しまして、特に学校ではスポーツ教育を推進しております。その関係で、スポーツ教育推進校を300校、部活動推進指定校を30校指定しております。こうしたスポーツ教育を推進する事業の一環としまして、今回、アスリートによる「一日校長先生」と「部活動指導」という二つの事業を行いますので、御説明をします。

記書きの1番です。「一日校長先生」事業、これは、名前から見てお分かりのように、アスリートを一日校長先生ということで学校に派遣しまして、子供たちとスポーツ選手が直接交流をすとか、また、運動やスポーツを楽しんでもらう。そういうような機会にしてみようということです。

(2) にありますように、具体的な活動例は、登下校時間、一緒に子供たちの登校を迎えていただくとか、また、朝礼とか全校集会、こういうところでお話をさせていただく。また、授業を見ていただいたり、その場でお話をさせていただくというようなことを考えております。実際には、次のページをめくっていただきますと、別紙1の方に「一日校長先生」の実施校が、日にちと、どなたが行っていただけるかというのを含めまして20校分載っております。この方々については、もう一枚めくっていただきますと、別紙2という資料の中に実際に行ってください方の簡単なプロフィールを含めた資料が載っております。左上の川上直子さんは、サッカーでアテネオリンピックに出場した方です。右側の方にいきまして、古賀稔彦さん、ソウルオリンピック、バルセロナ、アトランタと3回オリンピックに出場されている方です。こういった方々が学校の方に来ていただきまして、子供たちと交流していただくというものです。

もう一つ、2番が「部活動指導」事業です。これは、高等学校の運動部活動にアスリートが行きまして直接指導をしていただくということです。やはり優秀な成績を収めた方の指導というのは大きいものであるというふうに考えておきまして、部活動ですから放課後の活動ということで一日2時間くらいですけれども、それを4日間やっていただくという事業です。当然のことながら、内容としましては、現役時代の体験談であるとか、学生時代の目標、心構え、そのようなお話をさせていただくとか、実際にゲームを見ていただいて、それについての講評、また、練習風景についての講評、更に顧問へは、どういう指導をした方がいいのかというようなことについての助言、こういったことをやっていただくということです。

これにつきましても、別紙1の下の方にありますように、部活動指導の実施校は4校です。来ていただける方は、先ほどと同じように、次のページ、別紙2の右下にありますように、バスケットボールの原田裕花さんからテニスの長塚京子さんという4人に来ていただくことになっています。

説明は以上です。

【委員長】 ありがとうございます。何か御意見ございませんか。瀬古委員、ありませんか。

【瀬古委員】 なぜ一日校長は10月しかないのですか。

【指導部長】 10月は東京都体力向上努力月間ということで、10月1日から31日までを体力向上の取組を強化する期間と指定しましたので、その間行っていただくと思っています。

【瀬古委員】 分かりました。これは若い人が多いですが、やはり動ける人を中心に選んでいるのですか。年配の方は一人もいないですね。

【指導部長】 スケジュール等を調整して、来ていただける方がこういう結果になったということです。

【瀬古委員】 これは東京都に登録しているのですか。

【指導部長】 東京都に登録ということではなくて、こういったものをプロモートする業者にお願いしています。

【瀬古委員】 これは年に1度しかやらないのですね。

【指導部長】 1度だけです。

【瀬古委員】 予算の関係とか、いろいろありますからね。

【指導部長】 はい。

【瀬古委員】 せっかく人材がそろっていますから、できれば、本当はもう少し違う形でやってもいいのかなという感じがします。

【内館委員】 府中市とか日野市とか、割と市部に偏っている気がしたのですけれども、受入校はどうやって決めたのですか。

【指導部長】 スポーツ教育推進校というところから、来ていただきたいという申請書をもらいまして、その申請の中身を見ながら、企画内容や推進校としての取組、更に地域バランスを考えて、総合的に配慮して決定しています。

【内館委員】 分かりました。

【委員長】 よろしゅうございますか。——〈異議なし〉——それでは、この件についても、報告について承ったということにさせていただきます。

参 考 日 程

(1) 定例教育委員会の開催

10月13日(木) 午前10時

教育委員会室

(2) 全国都道府県教育委員長協議会国際交流事業

10月15日(土)～22日(土)

シンガポール共和国

【委員長】 それでは、教育政策課長、今後の日程をお願いいたします。

【教育政策課長】 今後の日程について御案内申し上げます。教育委員会ですが、次回は10月13日木曜日、時間は午前10時から、場所は教育委員会室を予定しています。

また、全国都道府県教育委員長協議会国際交流事業のため、10月15日から22日の間、木村委員長にシンガポール共和国に御出張いただくことにしております。

以上です。

【委員長】 よろしゅうございますか。—— 〈異議なし〉 ——

それでは、非公開の審議に入らせていただきます。

(午前11時03分)